

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：23601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24390508

研究課題名(和文) 長寿社会における地域参画型認知症トータルケアプログラムの開発と評価

研究課題名(英文) Development and evaluation of the community-based total care program for dementia in a super aging society

研究代表者

渡辺 みどり (WATANABE, Midori)

長野県看護大学・看護学部・教授

研究者番号：60293479

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,000,000円

研究成果の概要(和文)：認知症の予防から終末期までの一連のケアの質向上のためのプログラムの実施、評価を行った。

身体機能維持の水中運動として歩行能力の維持向上とバランス能力が重要であり、5年以上継続したものには精神機能に効果が認められた。家族介護者相談は、未だ中等度の家族相談が多く、初期の相談システムの確立・構築が必要である。施設における随伴症状への対応や個別的なケアの質は、配置されているケアマネージャーのキャリア・職種による違いが認められ、キャリアの長い看護職の配置が必要と考えられた。終末期の生活への希望や意向は、個々の高齢者が持っておりこれらを尊重したケアが重要である。

研究成果の概要(英文)：In this study we implemented and evaluated the program to improve the quality of care for situations encompassing features from dementia prevention to end of life care. It was established that maintaining and improving physical functions, particularly the ability to walk is important.

The program was effective in sustaining the mental functioning of participants involved for 5 years or longer. The frequencies of consultation as requested by family caregivers were mostly for patients at moderate stages of dementia, suggesting the need to establish and create a consultation framework for patients who are at the early stages of dementia. The quality of care provided for patients at the facilities varied depending on the career and specialties of care managers employed, suggesting the necessity to involve nurses with long career. As the individual elderly patients have specific hopes and intentions for the terminal lives, it is important to provide care by respecting such intentions.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症 トータルケア プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

認知症看護におけるプログラム開発は、随伴する特定の症状、介護者の知識と理解、高齢者の交流の促進など、限局した症状と看護・家族介護者関係に焦点があてられてきた。認知症を持つ高齢者は人生という文脈上に存在する人々であり、長期の病状経過に伴いその体験世界は初期から中期は複雑化し、終末期に固定化する(阿保,2011)。このように、認知症高齢者は生活者として継続的かつ統合的な支援が不可欠であるにも関わらず、ケアの継続と統合という観点からの介入プログラムは未だ開発されていない現状にあった。

2. 研究の目的

認知症予防から終末期ケアに至るまでの、高齢者への個別的で質の高いケアを保障する地域参画型の認知症トータルケアプログラムを作成・実施し、プログラムの妥当性および適切性を検討することを目的とした。トータルケアとは、認知症とともに生きる個人を尊重しつつ長期の生活過程に沿った継続的かつ統合的なケアである。したがって、認知症の病態像を踏まえ、地域特性とそこに暮らす人々のニーズに密着することは欠かせない。プログラム開発は1)認知症予防のための生活相談と身体機能維持、2)認知症高齢者の個別の随伴症状への対応、3)認知症高齢者の身体合併症予防と対応、4)家族介護者支援およびケア提供者への教育的支援、5)終末期にある認知症高齢者と家族への支援という5つの観点から行った。

3. 研究の方法

- 1) 認知症予防を目的とした身体機能維持のための水中運動、ことに下肢の歩行能力、バランス能力を中心とした60分の水中運動を実施した。一年以上水中運動に継続して参加した高齢者100名の身体機能、精神機能、認知機能を測定し、非運動群と比較検討した。
- 2) 認知症高齢者の個別のケアを検討する目的で、48項目からなる個別のケアについて施設(グループホーム)の具体的なケア内容の実施頻度を調査した。ケアの実施頻度と内容は配置されているケアマネジャーの職種、経験年数の異なるそれぞれの2群間で統計解析し、違いを明らかにした。
- 3) 身体合併症の予防と管理については、老人保健施設におけるメチシリン耐性ブドウ球菌の分布とその性状について調査した。施設入所中の高齢者25名の鼻腔から15株のメチシリンブドウ球菌を分離し、保有率とその性状を確認した。
- 4) K市地域包括支援センターの「もの忘れ

相談」に過去一年間に家族介護者から寄せられた相談内容について、時期、認知症高齢者の状態、困りごとについて質的、量的に検討した。

- 5) 要介護状態や認知症になった時に、それぞれの高齢者はどのような希望や意向を持っているのかK市の高齢者53名を対象にグループインタビューを行い質的帰納的に分析した。

4. 研究成果

上記2.の1)~5)の結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 5年以上水中運動を継続した高齢者群は、運動非参加群に比べ、抑うつ傾向が有意に低かった。また、下肢の運動機能において、膝進展筋力の一部(利き足)、足指把持力の一部(利き足)において水中運動参加群は非参加群よりも有意に筋力が高かった。バランス機能としての重心動揺においては、有意差は認められなかった。さらに、運動継続群は日常生活において転ばずに「ズボンやスカートを脱いだり来たりする」「混雑した場所を歩く」「芝生や砂利の上などでこぼこした地面を歩く」自信が運動非参加群よりも有意に高かった。

高齢者が水中運動プログラムを継続した効果として、精神機能の一部と下肢の筋力、転ばずに生活動作を行う自信の一部に効果が確認された。

- 2) 施設における随伴症状への対応や個別のケアに関するケア実践は、配置されているケアマネジャーのキャリアが10年以上の施設群は10年未満の施設群に比べて48項目中10項目においてケア実践頻度が有意に高かった。

看護職ケアマネジャーの配置施設群では、福祉系ケアマネジャー配置施設群に比べて48項目中30項目のケア実践頻度が有意に高かった。施設ケアの質向上に向けて、キャリアの長い看護職のケアマネジャーの配置が必要と考えられた。

- 3) 身体合併症の予防と管理としてメチシリン耐性ブドウ球菌の分布とその性状を確認した。その内訳は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)が2株、メチシリン耐性表皮ブドウ球菌(MRSE)が7株、MRSE以外のメチシリン耐性コアグラゼ院生ブドウ球菌(MR-CNS)が6株で、これら的高齢者では、MRSEを含むMR-CNSが多く保有されていた。2名の高齢者では鼻腔に複数菌株のメチシリン耐性ブドウ球菌を同時に保有していた。

鼻腔内にメチシリン耐性菌を有してい

る人の割合は48%でありフィンランドや米国の報告と比較した結果フィンランドの54%と類似していた。

- 4) 家族介護者が、「最近目が離せなくなった」「最近、特に気が休まらない」と感じている家族介護者の主な困りごとは、「認知症高齢者は「身だしなみに気を使わなくなった」「夜中に起きだし、歩き回ったりする」「着替えやお風呂に入るのを嫌がるようになった」という内容が有意に多かった。

家族介護者からの相談は、未だ中等度の認知症高齢者の家族からの相談が多く、初期の認知症高齢者の家族介護者からの相談は少なかった。家族介護者が認知症の初期に身近に相談できるサポートシステムの構築が必要である。

- 5) 終末期の生活への希望や意向は、個々の高齢者が持っていた。具体的には、『自分が描く理想』『見えないこれからの自分』『家族や周囲の人との関係における自分』の3カテゴリーが抽出され、【人生を自分らしく生きたい】という生きる意思を持ちつつ【自然に逝きたい】という自分らしくあの世へ行きたいという気持ちも抱いていた。

高齢者は、終末期における生活と介護への意向として『自分が描く理想』と『見えないこれからの自分』の狭間でバランスをとりつつ『家族や周囲の人と関係における自分を通して人との関係性や距離感を押し量っていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6件)

有賀智也、渡辺みどり、千葉真弓、松澤有夏、曾根千賀子、細田江美 (2015): K市地域包括支援センターにおける「もの忘れ相談」の内容と出現割合の分析、日本看護福祉学会誌、査読有 20(2):283-295、

<http://id.nii.ac.jp/1054/00000172/>
渡辺みどり、細田江美、曾根千賀子、千葉真弓、松澤有夏、有賀智也、川喜田恵美 (2015): グループホームにおける認知症高齢者の「なじみの場づくり」のためのケア実践 - 看護職ケアマネジャー配置施設と介護福祉士ケアマネジャー配置施設の比較 -、日本看護福祉学会誌、査読有、20(2):227-241、

<http://id.nii.ac.jp/1054/00000175/>
曾根千賀子、渡辺みどり、松澤有夏、細田江美、千葉真弓、森野貴輝 (2015): 終末期の生活と介護に関する高齢者の意

向、長野県看護大学紀要、査読有、17:75-84、

<http://id.nii.ac.jp/1054/00000201/>
坂田憲昭、松澤有夏、曾根千賀子、渡辺みどり、千葉真弓、細田江美、中畑千夏子 (2015): 高齢者介護施設におけるメチシリン耐性ブドウ球菌の分布状況とその性状、基礎科学をもとにしたCo-Medial 研究会雑誌、査読有、3: 22-28、
細田江美、太田克矢、千葉真弓、曾根千賀子、松澤有夏、北山秋雄、那須裕、渡辺みどり (2013): 大学における高齢者水中運動講座への取り組み - 13年間の軌跡 -、身体教育医学研究、査読有、14:27-34、

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jpem/14/0/_contents/-char/ja/
細田江美、千葉真弓、渡辺みどり、松澤有夏、曾根千賀子 (2013): グループホームにおける終末期ケアの取り組み状況と課題(第2報) - 医療法人・社会福祉法人・NPO法人による比較 -、日本看護福祉学会誌 査読有 19(1):63-75

<http://id.nii.ac.jp/1054/00000180/>

〔学会発表〕(計 7件)

Tomoya Aruga、Midori Watanabe、Katsuya Ota、Mayumi Chiba、Yuka Matsuzawa、Chikako Sone、Emi Hosoda: Influence of sleep inducing drug on the subjective health status and fall-prevention self-efficacy of the elderly living in a region: Lessons from analysis of the elderly with exercise habits in Japan、31th International Conference of Alzheimer's Disease International、2016、4.21-24、Budapest、Hungary、
Midori Watanabe、Emi Hosoda、Mayumi Chiba、Chikako Sone、Tomoya Aruga、Yuka Egashira: Individualized care practices in care-homes for elderly people with dementia in Japan: Comparison of administrators' experience of dementia care、32th International Conference of Alzheimer's Disease International、2016、4.21-24、Budapest、Hungary、
Midori Watanabe、Emi Hosoda、Mayumi Chiba、Chikako Sone、Yuka Mastuzawa、Tomoya Aruga、Akio Kitayama: Factors of Related to Individualized Care Practice Provided in Group Homes for Elderly People with Dementia in Japan. 30th International Conference of Alzheimer's Disease International、2015、4.15-18、Perth、Australia、
有賀智也、渡辺みどり、太田克矢、千葉真弓、松澤有夏、曾根千賀子、細田

江美: 水中運動に取り組む地域在住高齢者の身体機能と転倒予防自己効力感の特徴、日本看護福祉学会、2015、7.5、北九州市、
曾根千賀子、渡辺みどり、松澤有夏、細田江美、千葉真弓、森野貴輝: 高齢者の要介護時期の生活と介護に関する意向日本老年看護学会第 19 回学術集会、2014、6.28-29、名古屋市、
有賀智也、渡辺みどり、千葉真弓、曾根千賀子、松澤有夏: K 市もの忘れ生活相談における家族介護者の困りごとと介護負担、日本看護福祉学会、2014、7.6、佐世保市、
坂田憲昭、松澤有夏、曾根千賀子、渡辺みどり、千葉真弓、細田江美、中畑千夏子: 高齢者介護施設におけるメチシリン耐性ブドウ球菌の分布状況とその性状、第 4 回基礎医学をもとにした C0-Medical 研究会、2014、11.8、山形市、

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6、研究組織

(1)研究代表者

渡辺 みどり WATANABE, Midori
長野県看護大学・看護学部・教授
研究者番号：60293479

(2)研究分担者

阿保 順子 ABO, Jyunko
長野県看護大学・看護学部・学長
研究者番号：30265095
安田 貴恵子 YASUDA, Kieko
長野県看護大学・看護学部・教授

研究者番号：20220147

百瀬 由美子 MOMOSE, Yumiko
愛知県立大学・看護学部・教授
研究者番号：20262735

堀内 ふき HORIUCHI, Fuki
佐久大学・看護学部・教授
研究者番号：90219303

征矢野 あや子 SOYANO, Ayako
佐久大学・看護学部・准教授
研究者番号：20281256

千葉 真弓 CHIBA, Mayumi
長野県看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：20336621

池田 光穂 IKEDA, Mistuho
大阪大学・コミュニケーションデザイン
センター・教授
研究者番号：40211718

(3)連携研究者

太田 克矢 OOTA, kastuya
長野県看護大学・看護学部・教授
研究者番号：60295798

坂田 憲明 SAKATA, Noriaki
長野県看護大学・看護学部・教授
研究者番号：70158912

喬 炎 TAKASHI, En
長野県看護大学・看護学部・教授
研究者番号：70256931

多賀谷 昭 TAGAYA, Akira
長野県看護大学・看護学部・教授
研究者番号：70117951

松澤 有夏 MASTUZAWA, Yuka
長野県看護大学・看護学部・講師
研究者番号：30436894

曾根 千賀子 SONE, Chikako
長野県看護大学・看護学部・助教
研究者番号：40336623

細田 江美 HOSODA, Emi
長野県看護大学・看護学部・助教
研究者番号：10290123

(4)研究協力者

()